

---

# マジックディフェクター

加那 翔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マジックデイクエクター

### 【Nコード】

N2888Z

### 【作者名】

加那 翔

### 【あらすじ】

魔法が使えるのが当たり前になっている現代。そこには一人の少年がいた……彼の名前は【柊隼人】。彼はこの世界で唯一、魔法を使えない魔術士 欠陥魔術士 だった。果たして隼人は、欠陥品でありながら何を思い、何を成し遂げるのだろうか。

この作品は作者が書いている【Valche-ヴァルチェ】のアレンジ版です。

## 第1話 Story of the opening (始まり) (前書き)

- ・この小説は作者が書いている【Valche-ヴァルチェ】の改善版となっています。
- ・某新人賞に投稿予定の作品です。
- ・評価をもらえると自身につながるので嬉しいです。
- それと同時にここはこんな感じにしたほうが……、とかいう意見ももらえると思います。
- ・状況によっては消すかもしれませんのでご了承ください
- ・小説家なるう向けに改行など出来ておりませんのでそこもご了承くださいませ

## 第1話 Story of the opening (始まり)

“あなたは魔法を信じますか？”

この質問に普通に答えるなら……信じない。と、そう即答できるだろう。だが、約100年前からそんな常識は根っから引っくり返された。

「あ、そっいや、どうやって魔法を見つけたんだっけ？」  
高級感溢れる車の中でふと、そう思った——俺、ひいろね 柊隼人であった。

「それはあれですよ、隼人様。頭がおかしいと言われていた研究員がたまたま【ヴェルジュ魔術器】を開発出来たっていうのが、始まりだったはずですよ」

魔術器 それは、約100年前に作られた代物。だが、開発成功は偶然の産物だった。

その偶然の産物を量産し始めた理由は、突然この世界に現れた魔物対策らしい。魔物とは、この世界にいきなり出現しだした化け物の総称だ。そしてその魔物を討伐するために作られた武器……それが魔術器。

「まあ、あんまり興味はないんだけどな。この学院に来ることになったのも“あいつら”のせいなんだし」  
「隼人様」

感慨深い表情で窓の外の気色を見ながら呟く俺を見て、家で働いてくれていた一人の侍女が言う。

彼女の名は湊 みなと 朱音 あかね といって、黒髪ロングで切れ長の目が特徴の女性だ。ちなみに職場では皆のお姉さんって立場で、正直に幼少のころから今までずっとお世話になった人。だからといって、歳をとってるわけでもない、というのも朱音さんは15歳のときからウチで働いてくれたからだ。

あ、ちなみにさっきの質問に答えてくれたのも彼女で、現在進行

系で運転してるのも彼女だ。

「それにしても一流の魔術士ワアルチェを育てる魔法学院ね」

隣に置かれていたパンフレットの表紙だけ見て言う。

そのトップページには『あなたの才能を開花させます』というキヤッチコピーと学校の写真があつた。

あなたの才能を開花つて、かなり怪しい宗教のキヤッチコピーみたいじゃねえか。と、苦笑気味に思った。

「あ、隼人様、パンフレットはご覧になっていただけましたか？」

「いや、今見てるから」

「それを聞いて安心しました。最後までしっかりと読み上げてくださいな」

「はいはい」

どうでもいいような返事をしながら、何でもかんでも世話をしたがる朱音さんに心の中でだけ呆れる。

「へえ、実戦込み3年のカリキュラムね。中々本格的じゃないか。」

それからパンフレットを読み上げていったのだが、目の付いたのはその部分だけだった。その他にはほとんど同じようなことしか書かれていなかった。3年間というカリキュラムはどこ的高校でもおなじじだけど、実戦込みか……。さすが国が建てた魔法学院は違いますってか。

「……隼人様、目的地につきましたよ」

「あ、もうついたんだ」

結局、パンフレットを最後まで読み上げてしまったな。

そのせいか時間が経つのが早い気がした。家で聞いた情報だと1〜2時間は普通にかかるはずなんだが。

「それは隼人様が途中で寝てたからですよ」

ああ、そういやそうだったな。

うたた寝程度のもりだったのだが、普通に爆睡してしまってい

たらしい。

「ここが、今日から通うことになる【クラリア魔法学院】か」  
車から降り、目の前にそびえ立つとても大きく立派な校門を見上げながら呟く。

俺は家庭で色んな事情があつて、この魔法学院に転入することになった極普通の高校生だ。

基本的に黒く、ところどころに赤のラインが入っている学院指定の制服ブレザーを着ている。

「それにしても、大きな門だな」

（こんなに門を大きくする意味つてあるのか？）

身長175cmの俺でも、4分の1もいかないくらいだから少なくとも5m以上はあるだろうな。

「で、それは置いておいても良いとして……」

遅れてきた場合つて、どうやって入ればいいんだろうか？ と思う。

このクラリア魔法学院は、学生寮があつて基本的には外出できない。

つまり、外出することなんてあまりないので、この校門の通り方がわからないということだ。

それに俺の場合、家の都合で遅れると報告を入れていたんだけど、学校側から何の連絡もきてないんだよね。

「これつて、どうしたら良いんだろうか？」

あれ、これつてツンだ？ と思いながら視界を動かすと、その横に少し小さい門を見つけた。

「こっから入れそうだな」

そう考えて、門とくぐり抜けようとした瞬間

「今日から通うことになつてる柊君？」

不意に後ろから声をかけられる。

「うひゃあ!？」

その声に驚き、素っ頓狂な声をあげてしまう。

振り返ると宝石のような紅い瞳が特徴的なお姉さんがいた。決してご機嫌とりでお姉さんといってるわけじゃないぞ。

本当にお姉さんに見えたからだ。

「ええっと、柊君ですよね？」

「ええ、そうですけど」

「あ、申し遅れました。私、このクラリア魔法学院1年A組副担任の紅くれなゐ有紗ありさです。よろしくね」

迎えに来るために1年A組の副担任が来た。つまり俺は1年A組に入ることになってるってことだよな。

よそのクラスの担任が迎えに来るとは到底思えないし。

「よ、よろしくお願いします」

あんまり人と喋る機会がなかったからか、いざ話すとなるとどもってしまふ。

あと、目の前にいる自分の副担任が美人。それも理由の一つかも知れない。

「あ、私のほかにも紅っているから、私のことは有紗先生って呼んでね」

「はい……、わかりました」

「ふふっ、ちよつと緊張してる？」

「まあ、そうですね。みんなより遅れたので馴染めるかどうか。っていうので、緊張はしてますね」

未だに鼓動が鳴り止まないからね。

「さあ、どうぞお入りください」

有紗先生に言われた通り学院内に入り、先を歩いている先生の後をついていく。

## 第2話 Magic defect person 欠陥品

「とまあ、こんな感じに色々あるわけです」

「は、はあ……」

表には出していないが、内心グツタリする。普通にクラスに行けばいいのに先生が、『まだHRの時間じゃないから、今のうちに案内します』と言ったからだ。それのおかげで学院のどこに何があるかは、大体掴めた。

(この状態で笑顔で自己紹介を出来るだろうか？)

「……さてと、そろそろ授業も終わるでしょうし。 教室へ向かい

ますか？」

「お願いします」

思わず即答してしまう俺であった。

自己紹介さえ笑顔で切り抜けることが出来れば、あとは楽なんだからな。

「あらら、そんなに必死になるほどこれからの友達と会いたいわけね」

そんな大層な理由と違って、ただ単に脳みその容量をオーバーさせたくないだけなんだけど。

あ、それともう一つ理由があった。この案内を早く終わらせて、という思いからだろう。

「わかったわ。そんなに真剣に言うのだったらついてきて」

そういつて教室に向かうだろう紅先生のあとを黙ってついていく。その間にさっきの言葉を思いだし、顔をしかめる。

(俺に友達は出来ないよ、有紗先生。だって俺は……)

魔術士の欠陥品 欠陥魔術士ディヴァルチエなんだから。



「私が入ってきて、って言うまでここで待つといってもらっていいかな？」

「あ、はい。わかりました」

あの有紗先生による 地獄の案内 を終えてから5分後、これから自分の通うこととなる教室前の廊下の壁にもたれながら立っていた。

だが、そんな俺を叱ることなく先生は一言かけてから、教室に入っていく。

まあ、そうだろうな。 あの人が連れ回したんだから。

それが原因で少し申し訳なさそうな表情で話しかけてきたのか、と納得しながら思い返していると教室から声が漏れてきた。盗み聞きするワケではないが、なんとなく耳を傾けてみる

「あ、有紗先生。転入生が来ましたか？」

「はい、きましたよ。今、廊下で待つてもらっています」

おおっ、という歓声じみたものと共に教室内の熱気が高まったように思える。

この騒々しさ、隣のクラスに迷惑じゃなかるうか？ そんな期待に添えられるような生徒じゃないと思うんだけどなあ。

「先生！ 転入生は男なんですか？ それとも女？」

いかにも活発そうなイメージが出来る女子の声が聞こえてきた。

誰かが転入してくることは既に周知されているのだろうが、名前や性別など詳しいパーソナルデータも知らないらしいな。

「転入生は男だ、それもかなりイケメンだぞ」

答えたのは聞き慣れない声。少なくとも有紗先生では無かった。性別が違っていたからだ。

そういえば先生は副担任と言っていたから、つまりは正担任だろうか。

その、おそらく正担任と思われる人物の答えに女子がわー、きゃーなんていう色めき立っているような声を上げるが、男子生徒たちは

どこか不満げに唸っているようだった。入ってからの反応が本気に怖くなってきた。そんな俺であった。

『さて、そろそろ入ってもらいましょうか。柊君、入ってきて!』  
「もう、お呼ばれか。もう少し覚悟を決める時間が欲しかったんだけどな」

教室内に聞こえないように小さく、消えそうなくらいの音量で咳く。

そして取っ手に手を伸ばしながら、心底疲れきったときにしか出ない深いため息を吐きだす。

よし、覚悟は出来た。大丈夫、何とかなる。

そう自分に言い聞かせて深呼吸をし、その手に力を込めた。

「失礼します」

教室に足を踏み入れた瞬間から、ざわめきと自分に集まる視線を感じる。

全身に妙な圧力が掛かったかのように思えたが、それを振り切り声を発する。

「柊 隼人といえます。家の事情で色々とあり世間のことはあまり知らない未熟者ですが、よろしく願います」

「はいはい。とまあ、こいつは複雑な家庭の事情でこちらに転入してきたってわけだ。

こいつは極度の箱入り娘ならぬ箱入り息子だ。困ってたら助けてやってくれ」

先生の言葉にはい、と返事を返す生徒達。今、チラッとだけ見たんだけど、この俺と同じ身長もしくは小さいこいつが担任か。

「あ、そっぴやお前にはまだ、俺の名前を言ってなかったな」  
ふと思いついたかのように男の先生は言う。

そっぴえばそっぴだな。女の先生 有紗先生の名前は聞いたけど。

「俺の名前は紅<sup>くれない</sup> 玲也<sup>れいちや</sup>だ。ま、よろしく頼む」

「はっ? 紅……?」

仮りにも先生なのだから、きちんと敬語を使って接しよう。

そう思ってたのだが、先生の一言によって口に出さないでおこうとしていたタメ口の一部分が出てしまった。

「ああ、そうだ」

「え、だって……えっ？」

「転入生君」

「あ、はい」

予想外の事実には焦っていると、一番前の席の見た目からして元氣そうな女の子に呼ばれる。

「大丈夫、ここにいるみんなもそんな感じの反応だったから」

ああ、そうだったのか。やっぱりな、これはさすがに驚くわ……って、そんな納得してる場合じゃない!!

「え、この二人って姉弟何ですか？」

「転校生君。今、きょうだいでって漢字をどう考えた？」

「そりゃあ、姉に弟って書いて姉弟だけど」

「ぷっ……、だってさ玲也先生？」

太陽のように輝く満面の笑みを浮かべながら言う女の子の目線の先には、肩をプルプルと震わせる紅玲也先生の姿があった。その横で口元を抑えながら笑いを耐える紅有紗先生の姿も。あれ、俺なんか変なこと言った？

「終……」

「はい、なんででしょうか？」

「俺は弟じゃねえ！ 正真正銘、夫だ！」

え、この人何て言った？ 夫？ ということは、普通に考えて有紗先生の夫ってことだよな。

「ははは、……マジですか？」

この人の聞いても嘘をつく可能性があると考え、有紗先生に聞く。  
「ええ、本当よ」

くすくすと笑いながら答えてくれる有紗先生。へえ、これって本当だったんだ。

俺的には嘘っぱかったんだけどな、だってかなり身長が低いし。だって成人女性よりも低いか、同じくらいってかなりチビじゃね？

「チビって言うな　!!!」

隣で飛びかかってこようとしていた玲也先生の襟元を掴み、有紗先生は引き止める。

「玲也、そろそろ話を進めなさい」

「……わかったよ」

おお、これが新妻の力か。と、納得する俺であった。

「さてと、柊の席はどこにするか？」

教室の後ろのほうを見ると、何か空席があった。ざっと数えて4つか。

まさかもうやめたってことはないよな？　もし、そうだとした

らどんなに厳しい学校だよ。

「おお、ちょうど良い席が空いてるな」

この魔法学校について考えている間に、どうやら最適な席を見つけたようだ。

「柊、あの席でいいか？」

先生が示した席は、外の気色が一望出来そうな窓側の空いている席。

それと同時に授業を寝てサボるにはちょうど良いところだった。

「ああ、べつに構いません」

「それじゃ、柊の世話は頼んだぞ。水城姉」

今日から俺の席になる場所から見ても、右の席に座っている大人しそうな女の子だ。ただ見ただけの印象で言ったら、さっきの女の子が太陽ならこっちの女の子は月かな。それが俺の二人の女子に対する印象だった。

「はい、わかりました」

「それじゃ、授業を始めるぞ。柊、席につけ」

「はい」

席まで歩く時間で俺は思ったことがある。

それは、このクラスの子が可愛い子ばかりということだ。  
はい、ぜひぜひ話でしたね。よし、ちと席にしよう。

第3話 Two people who quarrel 決闘の約束

「柊君で合ってるよね？」

「あ、ああ」

自分の席についた瞬間、タイミングを見計らっていたのかすぐに隣の女子が話しかけてきた。それもいきなり過ぎたせいでかなりビツクリしてしまう。

「あ、いきなりでごめんね。私、水城彩葉っていうの。これがらよろしくね」

「こちらこそよろしく」

さっき自己紹介はしたから別にしなくていいだろう。そう考え、名前は言わなかった。

それにしても、アレだな。さっき言った通り、このクラスの子は可愛い子ばかりだな。

水城だってそのうちの一人だ。というか、こんな黒髪美少女を可愛いと言わずに誰を可愛いっていうんだ。

「では、柊の自己紹介も終わったことだし、真面目に授業でも……」「冗談じゃないですよ!!」

授業を始めようとする玲也先生に愚痴を言う男子生徒。

「何で実力が未知数で……こんな、見るからにモヤシみたいなのと勉強しないといけないんですか!？」

「もやっ……」

肉をいくら食っても体つきが変わらないモヤシで悪かったな。これのせいでどんなにウチの使用人におちよくられたかわかるか？

当初はあまり気にしてないようだったんだけど、俺の食事とかそういうのお世話をしてもらっていたときに放った言葉があれだぞ。

『隼人様は細身ですから女装したら似合いそうですね』

アレはホント、身震いしたね。

女装なんて男がしたくないものベスト3に入っているぞ。まあ、

これは俺個人のしたくないことベスト3だけどね。

とにかくそんな気にしてる身体的特徴を言われ、いきなりキレるよ  
うなことはなかったが、俺がキレてることはバレているだろう。

だって自分でもわかるぐらい額に血が上ってるし、歯を食いしば  
って我慢してるのがモロバレしてる気がするから。

「しかも、こんな男か女かわからないようなやつ……」

「はぁ……、どうしてこう人を馬鹿にするやつが多いんだろうな」  
さっきの理由だってそうだ、かなり理不尽過ぎないか？

何でこんなモヤシみたいなやつと一緒に勉強して……理不尽過ぎ  
んだろ！！

「何だと！！」

「ああ、バカの頭では一回で理解できませんか」

「テメエ……」

「文句しか言わない負け犬は黙ってるって言っただよ！！」

そう宣言すると同時に男子生徒は大気中に無数にある光の粒子  
魔力の欠片をその手に集め、魔術器を展開させる。

「テメエはここで殺す！！」

剣型の魔術器で俺に切りかかってくる。よし、これからこいつの  
ことはバカって呼ぶことにしよう。

こんなところで魔術器を発動させたらどんなことになるか、わかっ  
てるくせによ。同時に女子達の悲鳴や、男子達の絶叫が教室中に響  
きわたる。

魔術器とは持ち主の魔力や魔力吸収力によって威力が変わる。魔  
力がよくても魔力吸収力が小さければ魔力がすぐに底をつき弱いと  
いう話はザラにある。それに対して、魔力は弱いと魔力吸収力が強  
ければ強いということもある。自身に残っている魔力がなくなれば  
吸収すればいいだけだからな。

つまり魔術器に強弱をつけることは不可能だ。実際、使い手によ  
るのだから……でも、一つだけ言えることがある。

それは、魔術器はどれだけ弱くても破壊力は抜群ということ

だ。

「いいぜ。そっちがその気なら、受けて立つぞ」

密かに眠る怒りを抑え、極めて冷静に腰のベルトから拳銃を取りだし、それで魔術器を受け止める。

その直後、膨大な魔力が俺を襲った。

「うっ……。おいおい、魔力が大きすぎんだろ」

こいつの魔力、どれだけ強いんだよ。

さすがにこれは愚痴らずにはいられない。あまり表情に出さないようにしてるが限界に近い。

こいつのバカみたいに多い魔力によって力押しされているからな。

「なっ!？」

それに驚く生徒達だが、特に驚いていたのはバカだった。

まあ、そりゃそうか。自慢の剣を欠陥品に防がれたんだからな。

しかも魔術器ならともかくただの拳銃で。

「どうした……。俺に喧嘩売るのやめておくか？ まっ、それ

が妥当だろうな。威張ってるくせに実力のないお前なら」

ブチッ、という音がバカから聞こえた気がした。

まあ、こんな台詞言われたらムカつくよな。俺でもムカつくよ、言うほうは超楽しいけどね。

でも、正直言っついていいか？ この体制、かなり辛いつす。更に挑発したのは失敗だったかも。

「ふざけるのも大概にしろ!！」

その叫びと同時に剣に力が入られる。

「ふざけてんのはどっちだ!! いきなり切りかかってきやがって……。それに俺に対しては別に傷をつけても構わない。だが、周りの被害を考えたのか!? 仮にもだ下手に戦ってしまった場合、水城にも被害が行くって可能性を少しでも考えたのか」

俺は怪我に強いから別に対したことにはならないだろうが、周りに被害がいくだろうが。

一番後ろのこの席だと被害を受けるのは、真横の席である水城だけ



だろうな。

「水城、剣を直せ」

「……………」

玲也先生の命令に不服そうな表情を浮かべながらも剣を降ろす。そして剣先から光の粒子へとなくなって消えていく。

「柊もだ」

「はい」

大人しく拳銃をベルトに直す。

これ以上、戦ってたら力押しで負けてたかもしれないからな。

「お前ら、戦うなら後で戦え。もしくは来月末に【クラス対抗戦】チームマッチもあるが……………」

黒板にクラス対抗戦と書いて、チームマッチと呼んだ。

そして、ま、これはチーム戦だから意味ないか。と自粛するかのごとく言う。

ほう、クラス対抗戦か。読んで字のごとく、クラスの何人がチームを組んでクラスの代表として戦うってことかな。

参加してみたいな。まあ、俺は普通じゃないから無理だと思うけどね。

「この際だから言っておくが、校外学習は今月の末にあるからな、覚えておけよ。ちなみに行く場所は、てんまちよう天満町 だからな」

天満町か…………、確かあそこは魔法が初めて発明された場所だったかな。

その記念に、魔術研究所や記念館が建てられているんだっけ。あまりにも関わりのない話だったから、もうほとんど覚えてねえや。(…………それにあの場所に行くのは“あの人”から止められていたしな)

ん、今月末？

ふと先生の言った言葉が妙につっかかった。今日が25日だから、今月末っていうと…………来週!?

しかも天満町ってかなり遠くないか、新幹線にでも乗って行くの

か？

「さて、授業を始めるぞ」

それでも何も言わない他の生徒達を見て、事前に知らせられていたんだろ。と思うんだけどさ……俺にも事前に話していてくれよ。家のほうに電話とか魔法で伝言を送るとか出来るでしょうが。

「さて、今度こそ授業を始めるぞ」

こうして無事に授業が始まったわけだが……。

(全然、わかんないや)

そう、今まで勉強も出来てないので全然わからないのだ。それはもう、完璧に。

潔く手をあげて申告するべきか？ いや、でもな言うのは良いんだけど、水城にバカにされるのが目に見えてムカつく。

ーそんなときだった。

コンコンツ、と机を指でつついたような音が聞こえた。

「んっ？」

音を出していたのは、隣の席に座っていた水城だった。

いや、バカにするだろうと思った水城はあなたじゃなくて男版水城ですよ？ と、内心は焦っていた。

顔に焦りをださない理由は、小さい頃から仕込まれてるからだ。

「ごめんね、柊君」

「へっ？」

水城がいきなり謝ったことにおどろく。正直にいつて驚いたのは悪くないと思う。

何て言っただって水城が謝る理由なんてないんだから。

「なんで謝ってたんだ？」

「弟が迷惑をかけたでしょ？ それでね」

「弟？」

こいつが自分の口でそういった事により、今まで俺の中で可能性としか考えていなかった“IF”の話が実現した。

「えっ、ホントに姉弟なのか？」

「うん、あんまり似ていないって言われるんだけどね」

あー、何となくそれは言った人の気持ちかわかる気がする。

さっきまで苗字がたまたま一緒なだけだと、思ってたし。何故か姉弟なのに髪の色とかも違うからね。

「で、何でお前が謝んだよ」

「えっ」

気の抜けたかのような声を水城姉はあげるが、気にすることなく話を進める。

「アレは俺が勝手にキレたせいじゃん。　　 안타のせいでもねえし、弟のせいでもねえよ」

まあ、 안타の弟の言動にムカついたっていうのが実は5割あるんだが、口には出さないでいた。

理由としては一つ、これを言ったらまたしても水城姉が謝ることになりそうだからだ。

「ふふっ、柊君って優しいんだね」

水城姉の満開の笑顔、それは今まで俺の中にあつた“月”というイメージをガラツと変えた。

まるでそれは月とは真反対の太陽のようだった。そんなイメージと反対の笑顔を見てしまったせいか、胸の鼓動が早くなっていた。

「ん、どうしたの？」

「あ、いや、何でもない」

思わず見とれてしまっていた……、なんて口が裂けても言えないな。

主に恥ずかしさ的な意味で。

「そう？　　なら、その件は良いんだけど」

ほっ、と息をつく。

だが、それと同時にある点に気づいてしまう。

「それじゃあ次の質問だけど……」

(うわぁ、やっぱりまだあるのか)

その件って言った段階で、まだ質問があるとは思っただけさ。ま

さか本当にあるだなんて。

「なんであんなに　唸っていたというか、考え事をしていたの？」

「……俺、そんなに口に出ってた？」

「うん、小さな声だったけどね。席が近かったから聞こえたんだよ。周りに聞こえるぐらい大きな声を出したつもりはないんだけどな

……。

「で、どうしたの？」

「ええっとね……」

これは言っても良いのかな？　ってか、言うべきなのかな。

別にいうのは良いんだけど、何とか情けない気がするんだよな。

「気にしないで、どんな悩みでも笑わずに聞いてあげるから」

「じゃあ言うけどさ」

「うんうん」

絶対に笑わない、水城のその台詞を聞いて言おうと決心する。

「全然、授業内容がわからないっす」

「……………」

俺の回答が予想を遥に超えていたのか、少しの間無言になる。

そして頭が理解出来るようになったのか、軽く吹き出した。

「あ　、笑わないっていったろ！」

「ごめんごめん。あまりにもバカバカしいところで唸っていたんだなあって」

「……悪かったな。小さなことでも気にするバカで、男にはプライドってものがあるんだよ」

「本当にごめんってば。で、迷っていたのは全部だったっけ？」

ああ、と肯定するかのように頭を縦にふる。

教科書の初めの方を眺め、悩ましげな表情をしていたので困った様子というのがわかった。

「急にごめん。迷惑になるんだったら……」

「あ、いや迷惑ではないよ。ただ、教室の中では話せないかな」

そんなに難しい話なのか、それとも黒板を使うという意味かな。

「先生」

「ん、どうした、水城姉」

「柊君に基本から教えたいので、別室に移動してもいいでしょうか？」

水城姉がそういって紅先生はため息をつき呆れた。

その呆れた態度は確実に俺に対してだろうな。

水城姉が不真面目ってわけはなさそうだし、まあ、理由として妥当なのは魔法の基本も知らねえのか。って、感じかな。

「はあ……、仕方ない。理解されていない状態でこの授業をうけられても困るからいいぜ。その代わり、まともに話を理解出来るランクにまでは上げてくれ」

「了解です」

許可をとった水城姉は俺の手をとって教室から出る。

そして1年生の教室が揃っている1年生エリアを通り抜ける。

他の教室の前を通る瞬間、奇妙なモノを見るような視線にさらされたが気にしない。

「水城、どこまで行くんだよ」

「あの部屋」

俺の手を握りながら真正面を指さす水城。

気になったので見てみると、このまま真っ直ぐのところはドアがあった。というより、部屋があると行ったほうがいいのか。

そして真正面にあるドアを勢いよく開け、中に入っていく。

第4話 Personalized instruction 練習

「おおつ、すげえ」

部屋に入っただけ、目についたのは周りの気色だった。

この部屋について説明を求められてもすげえとしか言いようがない。

強いていうなら、まさしくトレーニングルームって感じだな、かなり施設の範囲が広いし。

しかもソレ専用の施設ですよ、的気な雰囲気はブンブンしてる。

「どう、ここなら遠慮なく教えることが出来るでしょ？」

えっ、ここには黒板すら無いんですけど。

黒板だけでも関わらず机とか、そういう勉強するような道具すら……。

「なっ!？」

周りを見回すために顔を背けた一瞬の間を狙い、水城は魔法を使ってきた。

それをかなりギリギリの線で避ける。正直言ってかなり危なかった。

ノーモーションで魔法を放ってくるなんて反則だろ、というか、なんで魔法を使えるんだよ。

少しでも反応が遅れていたらゲームオーバーだっただろ。

「あつぶねえな、いきなり何をしゃがる!！」

「魔法 それは、魔術器を通して放つことの出来る魔力の塊みたいなもの。」

だけど、それを極めると魔術器を通さなくても攻撃が出来るようになる……こんなふうに、ね!！」

水城は言い終えたと同時にこちらに手のひらを向け、手が蒼く光る。

次の瞬間、勢いよくこちらに渦をまきながら向かってくる水流が目視出来る。

「おいおい、そんなのありかよつと」

バックステップで距離をとり、ベルトにつけている拳銃を手に持つ。

ちなみに入っている弾はゴム弾だ、怪我でもしたら危ないからな。

ま、敵との戦いだと容赦はしないけどな。

「喰らいなっ！」

そしてその拳銃から一発の銃弾が放たれ、それは見事な軌道を描き水流に直撃し水流を逸らすことに成功する。

「……なるほどね。戦闘のセンスはあるのね」

「質問に答える」

俺の問いを無視しようとしていた水城の額に銃口を向ける。

いくらなんでもあの水流はやりすぎだ。最初の技はなんとか見逃そうとしたら出来るけど。

「何しやがるって、そりゃあ勉強よ」

「勉強……？」

「ええ、勉強。あなたは何となくだけど、体で覚えるタイプっぽいしね。こっちのほうが簡単かな……って」

なら、事前に言っと思ってくれよ。冷静に対処出来たと思うかも知れないけど、かなり驚いてたんだからな。

「それに悠里と戦うことにほぼ確定でなってるんだから、少しぐらいは強くないとね」

悠里……、ああ、水城の弟か。

名前で呼ばれてもわからなかったよ。まあ、自己紹介してないからだろうけどさ。

「まあ、そうだな」

さつき戦ってみてわかったんだけど、あいつは強いからな。

少しでも強くないといけないという気持ちはわかるし、俺自身も強くなりたい。

だけど、模擬戦闘をするなら事前に言ってください。

「で、どうやって勉強するんだ？」

「え、そりゃあ……柊君は魔術器を持つてる？」

「……持つてないな」

「えっ？」

言ったあとにしまった、と思ってしまう。

魔術器を持つてないってかなりおかしいじゃないか、と。

「あ、いや、ほら……魔法関係のことを知らないんだぜ？ 魔術器だけ持つてるっておかしくないか？」

咄嗟に思いついた嘘を言ってみる。この台詞だけ聞いているとありがちな理由だと思うが、よく聞くと話がめちゃくちゃだ。

本当にめんどうだな、欠陥魔術士は。

自分が魔法を使えないことを出来るだけ悟られてはいけないとま、クラスの人達にはこれからずっとしていることになるから、言っておいたけどね。……半分、デマカセの理由を。

「で、持つてなかった場合はどうしたらいいんだ？」

「うーんとね、魔術器じゃない武器って持つてる？」

「ああ、それならあるぜ。というかさつき、使ったじゃん」

疑惑の表情をまだ向けてくる水城に見せるため、ベルトにつけてあるホルダーから拳銃を抜く。

アレですよ。俺にまだそんな表情をぶつけてくるってことは、まだ信じてないってことだよな。

まあ、苦し紛れの言いわけだから仕方ないちゃあ仕方ないからさ。

「今、持つてるのはいつでも持ち運び可能な拳銃だけだけだな」

鞆を持ってきてもいいなら、他にもマシンガンとかその他諸々入っているんだけどな。

その鞆はすでに寮の方に運んでもらってるから取り出すのは無理な。

「ちよつと見せてもらってもいい？」

「おう」

壊すなよ、と一言だけかけて拳銃を渡す。



真面目な水城のことだから絶対に無いと言い切れるんだけどな。

一応、念のためだ。

「……これ、どこで手に入れたの？」

「そうだな。『父親』から貰った、としか言いようがないな。

『護衛のために持っていきなさい』って言って、学院に来る直前の日に渡された」

そう、これと先に学生寮に送っている荷物とかは全部、父親が渡してきたものだ。

つまりついさっき言った、マシンガンとかも父親からだ。

「なるほどね……。ってことは、柊君の父親はかなり柊君のことを心配してるね」

「はっ？」

あの人が俺の心配……？ 絶対に有り得ないな。

この世界から魔法がなくなるぐらい、ぜったいに有り得ない！！

「だから、これを渡した柊君のお父さんは柊君のことをかなり心配してるって」

「それはねえよ」

「えっ？」

急に俺の口調が刺々しいもの変わったからか、驚愕の声をあげる水城。

あいつは俺を蔑んだそのウチの一人なんだから。実の父親なのにな、と思う。

あの事件があつたせいで俺は人を信じられなくなった。たとえ、それが肉親であつたり、血の繋がった人物であつても。

（ いや、違うな ）

たった一人、たった一人だけ信じられる人がいた。

第5話 (前書き)

タイトルはあとでつけます

## 第5話

『ねえ、どうしてそんなに苦しんでるの?』

家の敷地の中に存在しているブランコで遊んでいると、話しかけてくる声があった。

だが、小さかった俺は何も聞いていなかった風に無視する。

『どうしてそんなに辛そうなの?』

「……アンタに何がわかるっていうんだよ」

知ったふうな口を聞かれたためか、もしくは心の中でずっと思っていた事を言われたからか刺のある言葉を放ってしまう。

『わかるよ。あなたの気持ち』

「えっ?」

声の主が放った言葉、それは幼少のころの俺を驚かせる言葉だった。

それに驚いたからか思わず顔をあげてしまう。

顔をあげた場所、声の聞こえた場所　その場所を見てみると一人の女性がいた。

(そいつはまるで妖精のようなやつだった。いや、もしかしたら妖精だったのかも知れない)

今、思えばあいつの体は光っていてあまり実体化してなかったような気がした。

『世界に見放されて苦しいんだよね、悲しいんだよね』

「っ!?!?」

自分の気持ちを当てられて、ビククリさせられた。

『でも、大丈夫。これからは私が護ってあげるから』

ブランコに座っている俺に近づいてきて、そのまま女性は俺に抱きついてくる。

それが限界だったからか、女性の温かさを感じたからかは定かでは

ないが俺は号泣してしまっ。

上で女性が何か言っていたような気がしなくてもないが、そんなの関係なしという感じで。

結果的にあの人が妖精だったとしてもしなかったとしても、昔から約束通り“ずっと護ってくれていた”のは事実だ。

そいつはまだ姿を現さないけど、いつか昔みたいに姿を見れる日が来ると信じている。

『……また会えるよ。 近いうちにね』

「えっ？」

「柊君、どうしたの？」

「声が……聞こえたんだ」

声が聞こえたような気がした。

俺をドン底から引き上げてくれた女性の声を。

「声……？ 私には聞こえなかったんだけど」

「まあ、そうだろうな。 あいつに会ったことがあるのは、昔の俺ぐらいだろうから」

「そう……。もしかしたらその人は柊君のことが心配だったのかもね」

そう、だったらいいんだけどな。今の頑張って生きている、この現状をあいつに見せてやりたいし。

あと、あいつに正式にお礼も言っていないからな。

「それじゃあ色々と話が脱線したけど、そろそろ始めよっか？これ以上脱線して時間をかけてたら先生に怒られちゃう」

「ああ、それもそうだな」

「…… アクアブライト！」

そういった瞬間、水城の手に光の粒子が集まっていく。

光の粒子は手に触れてる部分から形成されていき、双方に刃がついている双剣のような形になっていった。

「それがお前の魔術器か……」

「ええ、私専用の魔術器です」

アクアブライト　それだけでやっぱり水城専用の魔術器なんだとわかる。

潜在的に水の魔力を持っている水城が、アクアブライトなんていう魔術器を持っていたら強いに決まってるじゃん。

これで、水属性の武器じゃなかったら笑えるんだけどな。剣先から炎が出てくるとか。

「さて、そろそろ良いですか？」

「ああ、そっちこそ非殺傷の設定は済んだか？」

「大丈夫です、魔術器は主人の気持ちに反映しますから。私がおなたを殺したいって思わなければ大丈夫なんですよ」

「おいおい、それってつまりお前が俺を殺したいって思えばいつでも殺せるってわけじゃねえか。」

「まあ、私がそこまで殺したいって思う相手はいないから大丈夫ですよ」

「それなら良いんだけど……」

「ちょっと待て、ってことはこいつの弟と戦うときマズインじゃねえか？」

「あいつは本気で俺を殺そうとするぞ。あんなに啖呵切ったんだ、怒ってないとおかしいぞ。」

「内心、あいつとの戦いをかなりビビリながらも、今は水城姉との戦いに集中することにした。」

「行くよ」

「来いっ！！」

「強く拳銃を握り締め、相手の出方を伺う。」

「ふっ……」

「伺っていたのだが、何とも印象が変わる行動をしてきた。」

「普通に真正面から突っ込んできたのだ。」

「おいおい、本当に印象が違うな」

「それを簡単に拳銃で受け止める、はずだったのだが、正直いってかなり重い。」

重さだけでいうのであれば、こいつの弟の剣よりも更に上だ。だが、魔力は“感じない”。

「くっ」

「この攻撃を耐えるなんてさすが男の子だね」

「っ、当たり前だあっ!!」

水城を双剣もろとも弾き返すつもりで拳銃に力をいれる、それにより弾き飛ばされた水城だったが、少し離れた場所に着地をしようとしていた。

あいつ、身体能力が高すぎだろ。今の世の中あれぐらい強くないとダメなのかな。と、無理矢理納得する。

そんなことを思いながらも、攻撃のチャンスは見逃さない。

「隙ありっ!!」

体制を立て直し標準を水城に合わせ、撃てる限りの弾数をぶちまける。

あんなに身軽だと、これぐらいいしないと意味がないからだ。

「はっ、やっ……」

着地直前を狙ったはずなのだが、見事なまでに銃弾は切断され着地を許してしまう。

「どうやってそこまで重くしたんだ」

「知りたい？」

仕切り直しと言わんばかりに二人して体制を立て直す。俺はリロード作業を、そして水城はいつでも突っ込んでこれるような体制をとる。

「ああ、知りたいな」

どうやってしたのか本当に気になっていた俺は、これって質問に質問で返されてるよな。なんて思うことなく返事をしてしまう。

……水城みたいな身軽でスレンダーなやつがあんな重たいわけがないんだ。

つまり細工がしてあるとすれば、間違いなくあの双剣だ。そこまではわかってるんだ、だけどこれ以上がわからない。

「それじゃあ、教えてあげない！」

双剣を高く振り上げ、もう一回突っ込んでくる。

「おいおい、そこまで振つといて言わないなんてセコいだろ」

重力に従って落ちてくる剣先を右サイドにステップで避ける。

あんなの受け止め続けたら腕が悲鳴をあげ、おそらく折れるだろうと思っただから。

その直後、予想は正しかった。と実感することになる。

剣先が届いた地面がドゴンッ！！ というもの凄い音をたて、かなり凹んだからだ。

なんて言えばいいのかな、小さなクレーターが出来たって言えばいいかな。

「……あんなの喰らったら確実に死ぬって」

非殺傷って絶対嘘だよな。と小さなクレーターを見て体の心配をする俺であった。

だが、それと同時にクレーターを見てわかったことがある。

(地面が濡れてる？ ここには一切、水なんてな……いや、待てよ)

仮に、これは仮の話だ。あの剣の重さが水によるものだとしたら？ 布が水を吸うと重さが増すという現象と同じように、剣にも水をまとわせて重くしたのであればどうだ。

女の子なのに、あの力強さってのは説明出来る。

「そういうことか」

謎を解いてしまえば簡単だ、その事実には思わずニヤけてしまう。

「何、笑っているの……」

「ああ、ただ単にお前の力強さのネタがわかったただけだ」

直後、少し驚いたのか目を見開くがすぐに元に戻る。

「へえ、本当に見抜いたのならすごいね」

「だから、見抜いたんだって」

「なら、私のまえで証明してみなさい」

もう一度、飛び上がって同じ攻撃をしてくる。今度はさっきよりも高い位置からだ。

「……やつと先生の授業の内容が理解できた。俺は授業の内容がわからなかったんじゃない、理解しようとしてなかったんだ」

重力に従い急激に落ちてくる水城を見ながら呟く。

「実際、魔法なんて簡単なものだったんだ。大雑把な使い方としては二通りしかないんだから」

「はあああああああ!!」

魔法の基本的な使い方、それはただ単純に魔力を飛ばすだけじゃない。

最初の攻撃と同じように拳銃で剣を受け止める。

「魔術器に魔法をまわらせて攻撃することが出来るって言ってた意味が」

魔力を飛ばすだけじゃなく、魔術器自身にも魔力を纏わせることができるのだ。

「っ!?!」

「おそらくアンタはこの剣に水を纏わせている。誰にも見られないように圧縮してな」

「へえ、よくわかったね。正解よ」

やっぱりな……。当たっててよかったよ。

これで外れてたら無茶苦茶、恥ずかしいしね。

「だけど、ここからどうするつもり? 自分でいうのも何だけど、

これはかなり重いと思うよ」

「だろうな」

(だけど……)

剣を受け止めていた拳銃を手放す。

そして俺自身は後ろに一步、引き下がる。

「なっ!?!」

それにより勢いよく突っ込んできていた水城は、地面に激突してしまふ。

そして立ち上がるうとしたところに……

「チェックメイトだ」



と言って、銃口を水城の額に向ける。

「……参りました」

そりゃあな、参ってくれないと俺が困るよ。これ以上の奇策はないのだから。

第6話 (前書き)

例のごとく、タイトル後付け

## 第6話

「ほらよ」

模擬戦が終わったので、拳銃をベルトのホルダーに付け直し地面に座り込んでいる水城に手を差し出す。

「あ、ありがとう」

少し頬を赤くしながら水城は親切心だけで出した俺の手を取る。

（なんで頬が少し赤いんだ？ って、ああ、軽い運動をしたせいかな）  
まあ、あんなに動きまくっちゃあシンドイよな、俺だったらぶっ倒れるぞ。

はあ……女の子よりも倒れやすいつて、もつと体を鍛えないとな。自分自身で言っておきながら、勝手に凹んだ。……でも、これが事実なんだよね。

あんな何回もジャンプをしたり、アクロバティックな動きをしてたらシンドイもんな。

「さて、帰るか。そろそろ戻らないと先生に怒られる」

「……そうだね。でも、その前に聞きたいことがあるんだけどいいかな？」

「ん、なんだ？」

「最後の攻撃をどうやって避けたの？ じ、じゃなくて、拳銃を拾う隙なんて与えてなかったと思うんだけど」

確かに拳銃を拾う隙はなかったな。拾う隙は、ね。

「そりゃあ拾ってないからな」

「えっ」

「その証拠にまだあそこに転がってるだろ」

拳銃が転がっている場所まで行く。……アレを受けて壊れてなかったら良いんだけどな。

壊れてたらどうしようか、あいつらにいつて修理してもらうのも良いんだけど怒られそうだしな。『転入初日から何、壊してんだ』ってね。

「ほっ、良かった。無事みたい」

地面に転がっている拳銃を拾い、全体を見回してみるが異変はなかった。

「え、つまり、拳銃は二つあったってこと？」

「まあ、そういうことだ」

残念だったな、とまったく悪びれる様子もなく、言い放つてみる。当初から俺は拳銃を一つしか持ってないとは言ってなかったしな。まあ、これは許容範囲でしょ。

「まさかそんな手でくるとは、全然予想もつかなかったよ」

「今回は俺の勝ちだね」

「あーあ、そんな勝ち方をしてくるとは思わなかったよ」

まあな、許容範囲とは言ったものの、この作戦はかなり卑怯だからな。

水城弟と戦うときはもつとまともに戦ってみますか……。

「あ、水城。あのさ……」

今、ふと思ったんだけど勉強はしなくていいのか？

そう続きを言おうとしたのだけど、言えなかった。水城が俺の口元に指を出してきたからだ。

「……彩葉って呼んで。水城だと、悠里と重なってわからなくなるから」

「あ、ああ、わかった。その代わりに、俺のことも隼人って呼んでくれよ。彩葉」

「うん、わかったよ。隼人君」

そういえば友達の名前を呼んだのって、これが初めてだな。……

というかその友達すら出来なかったし、出来る状況じゃなかったし。「でさ、さっき言おうとしたことなんだけど」

「うんうん」

「勉強はしなくてもいいのか？」

「あつ……」

彩葉、完全に勉強のことを忘れて戦ってたよな。俺が言えたことではないけども。

俺も途中から戦いに真剣になって、勉強のことなんて考えてなかったからな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2888z/>

---

マジックディフェクター

2011年12月23日00時51分発行